



〔海の状況 (4/16~5/15) 〕

- ・小川地先の表面水温… 期間中は神子平年並み (平年差±0.5℃) ~はなはだ高め (平年差1.5℃~) で推移した。(図1)
※神子平年は、1988年~2017年の神子地先の平均値
- ・米ノ地先の表面水温… 4月中は平年並み (平年差±0.5℃) ~はなはだ高め (平年差1.5℃~) で推移し、以降はやや低め (平年差-1.0℃~-0.5℃) ~やや高め (平年差0.5℃~1.0℃) で推移した。(図2)

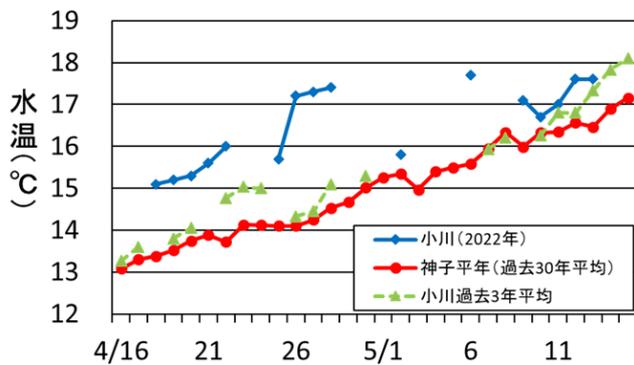


図1 若狭町小川地先における表面水温の推移

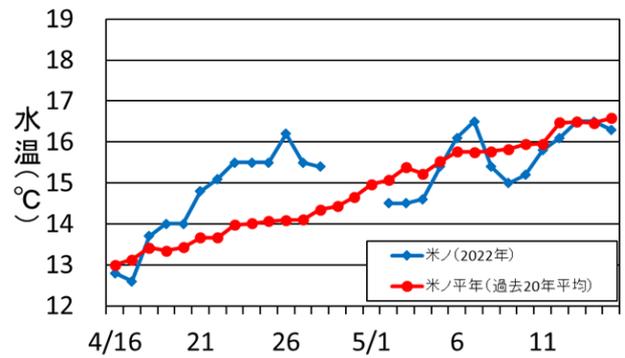


図2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

※小川過去3年平均は2019年~2021年の小川地先の平均値であり、2年以上の水温データが揃った日のみ取り扱っている。

〔若狭湾および周辺海域の海況：4月〕

4月の若狭湾およびその周辺海域の水温分布は、表層(水深0 m)では、若狭湾沿岸中央部で16~18℃と前年より高くなっていった。水深50 m、水深100 mでは、若狭湾沖で10℃~12℃の範囲が前年より大きくなっていった。水深200 mでは、若狭湾沖で4℃以下の規模が前年より小さかった。(図3)

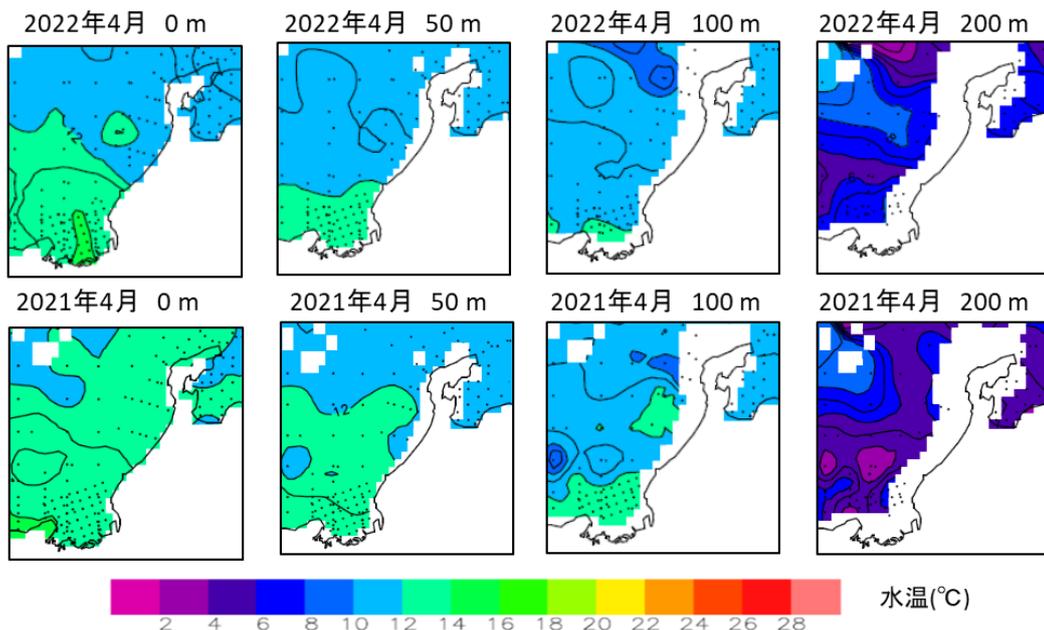


図3 若狭湾およびその周辺海域の水温分布図 (日本海区水産研究所の日本海漁場海況速報より抜粋)

(漁場環境グループ 岩崎 俊祐)

2022年度 第1回 日本海海況予報

水産研究・教育機構が2022年4月から9月までの日本海マアジ長期漁況予報を発表しましたので、その概要をご紹介します。

- ・日本海の来遊量は前年（2021年4月～5月、以下同じ）並みで平年を下回る。
- ・1歳魚の来遊量は前年並み、0歳魚の来遊量は前年並み～下回る。
- ・15～22cmの1歳魚が主体で、後半に15cm以下の0歳魚が主体となる。

この予報は、国立研究開発法人 水産研究・教育機構ホームページ (<http://www2.fra.go.jp/xq/>) から閲覧できます。
(漁場環境グループ 梶原 大郁)

〔県内の漁模様：4月〕

2022年4月の県内の総漁獲量は858 tで、前年同月を145 t下回った。

〔定置網〕

漁獲量は340 tで、前年同月を222 t下回った。マイワシ、マグロ類は大きく上回ったが、フグ類、タイ類は大きく下回った。また、アジは上回ったが、ブリ類は下回った。

〔底びき網〕

漁獲量は443 tで、前年同月を90 t上回った。アカガレイ、ハタハタは大きく上回り、フグ類は上回ったが、ホタルイカは下回った。

〔釣り・その他〕

漁獲量は75 tで、前年同月を13 t下回った。ブリ類、ヤリイカ、コウイカ、タコ類は下回ったが、ヒラメ、メバル類は上回った。

表. 主要魚種の漁法別漁獲量(4月)

定置網	(kg)				
魚種名	2022年	2021年	平年	前年差	平年差
イワシ類	92,181	5,366	14,986	86,815	77,195
(マイワシ)	87,101	3,733	11,214	83,368	75,887
(ウルメイワシ)	3,663	11	77	3,652	3,586
(カタクチイワシ)	1,417	1,622	3,695	-205	-2,278
アジ類	28,744	11,408	39,068	17,336	-10,324
(アジ)	20,974	5,510	19,659	15,464	1,315
(小アジ)	4,644	4,607	18,916	37	-14,272
(アオアジ)	3,126	1,291	493	1,835	2,633
サバ類	4,478	2,781	5,919	1,697	-1,441
マグロ類	17,370	2,739	1,092	14,631	16,277
ブリ類	92,945	120,097	114,781	-27,153	-21,836
サワラ	45,857	58,253	60,475	-12,395	-14,617
タイ類	7,693	35,596	15,860	-27,903	-8,167
スズキ	4,756	8,198	10,442	-3,442	-5,686
フグ類	27,265	292,405	63,960	-265,140	-36,695
スルメイカ	33	2,388	10,391	-2,355	-10,359
ケンサキイカ	903	3,016	1,101	-2,113	-197
ヤリイカ	1,614	1,486	2,751	128	-1,138
コウイカ	841	2,584	1,825	-1,743	-984
その他	15,698	16,330	23,191	-632	-7,493
合 計	340,378	562,647	365,842	-222,269	-25,463

底びき網	(kg)				
魚種名	2022年	2021年	平年	前年差	平年差
サバ	2,583	0	6	2,583	2,577
タイ類	10,273	6,672	5,849	3,601	4,424
スズキ	1,682	1,401	2,273	280	-591
ヒラメ	5,920	2,851	3,583	3,069	2,338
アカガレイ	84,585	40,507	71,951	44,078	12,634

底びき網の続き	(kg)				
魚種名	2022年	2021年	平年	前年差	平年差
その他カレイ	36,262	28,130	37,665	8,131	-1,403
フグ類	16,444	6,060	6,574	10,384	9,870
アナゴ	3,012	1,835	2,451	1,177	560
ハタハタ	29,191	13,271	18,412	15,920	10,779
ホタルイカ	161,894	173,140	240,924	-11,246	-79,029
アカエビ	52,482	48,094	36,326	4,388	16,156
その他エビ	10,214	5,381	4,845	4,834	5,370
その他	28,635	25,666	32,844	2,969	-4,209
合 計	443,177	353,009	463,704	90,168	-20,527

釣り、延縄、さし網、その他の漁法	(kg)				
魚種名	2022年	2021年	平年	前年差	平年差
ブリ類	1,215	2,618	9,252	-1,403	-8,037
タイ類	4,813	5,715	6,521	-903	-1,708
アマダイ	4,818	4,322	4,140	496	678
ヒラメ	5,426	3,481	3,909	1,945	1,517
その他カレイ	4,393	4,715	9,817	-323	-5,425
アナゴ	1,034	1,480	2,072	-446	-1,037
メバル類	10,320	5,759	8,409	4,561	1,911
ヤリイカ	1,383	3,672	2,650	-2,289	-1,267
コウイカ	1,502	3,866	2,501	-2,364	-999
タコ類	5,879	10,591	9,303	-4,712	-3,424
その他	34,094	41,846	64,017	-7,752	-29,923
合 計	74,876	88,067	122,590	-13,191	-47,714

全漁法	(kg)				
魚種名	2022年	2021年	平年	前年差	平年差
合 計	858,431	1,003,723	952,136	-145,292	-93,704

※1 平年の値は2012～2021年の10年平均です。 ※2 ()は銘柄、その他カレイはアカガレイ以外のカレイ類、その他エビはアカエビ以外のエビ類です。

〔近隣府県の漁模様〕

(漁獲状況…石川県：4月の定置網1日あたりの漁獲量。京都府：4月にJF京都漁連舞鶴地方卸売市場へ水揚げされた定置網1日あたりの漁獲量。兵庫県：4月の余部定置網1日あたりの漁獲量。鳥取県：4月中旬～5月上旬のまき網1統あたりの漁獲量。)

石川県…定置網…マイワシ 41.5t、ブリ類 3.1t、サバ 2.86t、サワラ類 2.67t

京都府…定置網…マイワシ 15.4t、サワラ類 2.9t、カタクチイワシ 2.7t、マアジ 0.6t

兵庫県…定置網…マイワシ 562kg、マアジ 457kg、スズキ 84kg、マグロ 16kg

鳥取県…まき網…マサバ 39.6t、マイワシ 36.5t、マアジ 16.1t、ブリ類 7.8t

(漁場環境グループ 梶原 大郁)

放流用アユ種苗の大型化に挑戦！

内水面総合センター

○放流用アユ種苗について

内水面総合センターでは、人工種苗放流による天然資源への悪影響（再生産性の低下や遺伝子汚染など）を最小限に抑えるため、主として県産の天然アユを親とした「資源に優しい種苗」を生産しています。とはいえ、まずはアユの放流をされている漁協さんに釣り用種苗として魅力があると思ってもらわなければなりません。（つまり、購入していただければなりません！）

そこで、今回は各漁協さんから長年にわたり要望のあった種苗サイズの大型化に挑戦してみました！

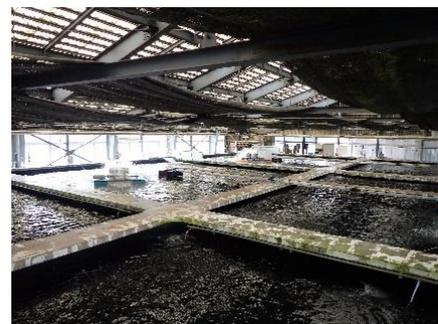


図1. アユ用 100t 水槽

○大型化への取り組み

例年の生産体制では、0.5g サイズの種苗を 100t 水槽 6 面に 20 万尾ずつ収容し、出荷時期まで飼育していました。生産初期は、アユも小さいため、給餌率を高く設定することができますが、サイズが大きくなるにつれて糞が増え、水質が悪化していきます。そのため、どうしても成長に合わせて給餌率を下げなければなりません。また、給餌効率の低下や密度の上昇も相まってなかなかアユは大きくなってくれず、出荷時点で平均 6g サイズにするのが限界でした。

アユの成長に影響する要素は種々ありますが、簡易に操作ができるものとして①収容尾数、②給餌率、③水温が挙げられます。今回はコストがかからない①と②を中心に調整し、例年より体重で約 20% 増の 7g を目標に生産を行いました。

まず、①の操作ですが、例年の 50～75% 程度の収容数に収まるよう、各水槽に 10～15 万尾のアユを収容しました。（本格的に生産試験するのであれば、1 水槽は例年と同量の収容尾数にして比較すべきところですが、施設の規模や予算の面で断念しました。）

続いて、②の操作ですが、例年は 4% から給餌を開始していたところを、今年は 5% から始め、水質や餌食いが悪くなるギリギリまで給餌率をキープし、段階的に率を落としていきました。

以上の簡単な操作でしたが、気を配ることは多く、アユと睨めっこをする毎日でした。アユが調子を崩した場合は、餌止めや投薬をするため、その時点で他水槽との比較ができなくなることや 1 尾当たりの重量が減ってしまうなどの悪影響が出てしまいます。ですので、給餌率を落とすタイミングには特に注意していました。



図2. 遊泳の様子



図3. 今年の出荷サイズ

○取り組みの結果

今回は、すべての水槽で目標の 7g を越える種苗を生産することができました。来年以降は更なる大型化を目指します！ と宣言したいところですが、次年度も 7g 種苗の生産が再現できるようにデータの整理と準備に努めていきます。

（開発調査グループ 千葉 駿介）